谷崎潤一郎『春琴抄』論

服部眞子

はじめに

『春琴抄』は一九三三年（昭和八年）六月に雑誌『中央公論』に掲載された谷崎潤一郎の中編小説である。[1] この小説は、「鵙屋春琴伝」という小冊子を基に、幕末から明治にかけて主従でもあり琴の相弟子でもあり、事実上の夫婦でもあった男女佐助と春琴の、一般的な関係性から逸脱しながらも共に歩んだ人生の軌跡が描かれた物語である。[2]

『春琴抄』は春琴の伝記である「鵙屋春琴伝」と、晩年の春琴と佐助に仕えた「鳴沢てる」からの見聞（以下、てる女と表記）、さらに、物語の語り手である「私」がそれら以外で仕入れた情報を基に、入れ子式で物語が展開していく。作中において、「鵙屋春琴伝」は〈佐助が誰かに頼んで書かせた春琴の伝記〉であると記されており、作品の冒頭で「されば内容は文章体で綴ってあり検校のことも三人称で書いてあるけれども恐らく材料は検校が授けたものに違いなく此の書のほんとうの著者は検校その人であると見て差支えあるまい」と書かれていることから、「鵙屋春琴伝」は佐助が自分の意図する通りに書かせたものだと言える。一方、てる女は晩年の春琴と佐助に仕えた人物である。「鵙屋春琴伝」に書かれた内容とてる女の証言は必ずしも一致する訳ではないことは、この作品を読む上で重要なポイントとなる。

谷崎の大正期の作品は西洋美を崇拝するものであったのに対し、谷崎の昭和期は日本回帰の時期であった。『春琴抄』を描いた時代の谷崎は、昭和六年九月に「盲目物語」、昭和六年十月、十一月、昭和七年一月、二月、四月、十一月に「武州公秘話」、昭和七年十一月、十二月に「蘆刈」を描いている。これらの作品ではいずれ

も女性崇拝の思想が根底にあり、谷崎が持つ女性への願望で描いた女たちを主人公に設定している。[3]

「春琴抄」はトマス・ハーディの「グリーブ家のバアバラの話」から着想を得ている。どちらの作品も語り手が話す入れ子式の物語となっており、作品を展開していく設定が似ている。また、両作品は人物の配置に対応関係があることも多くの論文で指摘されている。

また、本作品は鉤括弧の使い方が他の文学作品とは異なる。多くの場合は、登場人物の台詞の箇所に鉤括弧を使い、地の文と区別する。しかし本作品では登場人物の台詞が鉤括弧で括られることはほとんどない。それに対し、「鵙屋春琴伝」の引用箇所は鉤括弧で括られている。それに加え、作中の本文において句読点がほとんど打たれていないことも大きな特徴である。

本稿では、「鵙屋春琴伝」とてる女が本作で果たす役割を明らかにした上で両者の相違点を比較する。そして、春琴に関する架空の伝記である「鵙屋春琴伝」、春琴に仕えた佐助、さらに佐助とは別の視点をもつ「てる女」という三通りの視点によって描かれる春琴がどのような人物なのか、これらが『春琴抄』における語りにどのような影響をもたらすのかを考察していく。

一　「鵙屋春琴伝」が果たす役割

『春琴抄』の中で、「鵙屋春琴伝」から文章を引用した箇所は全て鉤括弧でくくられている。作中で「鵙屋春琴伝」をそのまま引用したと思われる場面を数えると全部で十箇所ある。「鵙屋春琴伝」を全ての場面で引用することが可能であったにも拘らず、なぜ特定の場面でしか引用しなかったのか。また、なぜそれらの場面で「鵙屋春琴伝」を引用したのか。「鵙屋春琴伝」からの引用である箇所を全て挙げ、引用されている場面の共通点を見つけると共に、前後の内容を照らし合わせながらその理由を考察する。

①　春琴の家は代々鵙屋安左衛門を称し、大阪道修町に住して薬種商を営む。春琴の父に至りて七代目也。母しげ女は京都麩屋町の跡部氏の出にして安左衛門に嫁し二男四女を挙ぐ。春琴はその第二女にして文政十二年五月二十四日を以て生る(p430)

②　春琴幼にして穎悟、加ふるに容姿端麗にして高雅なること譬へん物なし。四歳の頃より舞を習ひけるに挙措進退の法自ら備はりてさす手引く手の優艶なること舞妓も及ばぬ程なりければ、師もしばしば舌を巻きて、あはれ此の児、此の材と質とを以てせば天下に嬌名を謳はれんこと期して待つべきに、

良家の子女に生れたるは幸とや云はん不幸とや云はんと呟きしとかや。又早くより読み書きの道を学ぶに上達頗る速かにして二人の兄をさへ凌駕したりき（p430）

③ されば両親も琴女を視ること掌中の珠の如く、五人の兄妹達に超えて唯り此の児を寵愛しけるに、琴女九歳の時不幸にして眼疾を得、幾くもなくして遂に全く両眼の明を失ひければ、父母の悲歎大方ならず、母は我が児の不憫さに天を恨み人を憎みて一時狂せるが如くなりき。春琴これより舞妓を断念して専ら琴三絃の稽古を励み、糸竹の道を志すに至りぬ（p431）

④ 十五歳の頃春琴の技大いに進みて儕輩を抽んで、同門の子弟にして実力春琴に比肩する者一人もなかりき（p432）

⑤ 時に春琴は佐助が志を憐み、汝の熱心に賞でて以後は妾が教へて取らせん、汝余暇あらば常に妾を師と頼みて稽古を励むべしと云ひ、春琴の父安左衛門も遂に之を許しければ佐助は天にも昇る心地して丁稚の業務に服する傍日々一定の時間を限り指南を仰ぐこととはなりぬ。斯くて十一歳の少女と十五歳の少年とは主従の上に今又師弟の契を結びたるぞ目出度き（p437）

⑥ 春琴居常潔癖にして聊かにても垢着きたる物纏はず、肌着類は毎日取換へて洗濯を命じたりき。又朝夕に部屋の掃除を励行せしむること厳密を極め、坐する毎に一々指頭を以て座布団畳等の表面を撫で試み毫釐の塵埃をも厭ひたりき。嘗て門弟の胃を病む者あり、口中に臭気あるを悟らず師の前に出でて稽古しけるに、春琴例の如く三の絃を鏗然と弾きてその儘三味線を置き、顰蹙して一語を発せず、門弟為す所を知らずして恐る恐る理由を問ふこと再三に及びし時、妾は盲人なれ共鼻は確也、匆々に去つて合嗽をせよと云ひしとぞ（p442）

⑦ 二代目の天鼓も亦その声霊妙にして迦陵頻伽を欺きければ日夕籠を座右に置きて鍾愛すること大方ならず、常に門弟等をして此の鳥の啼く音に耳を傾けしめ、然る後に諭して曰く、汝等天鼓の唄ふを聴け、元来は名もなき鳥の雛なれども幼少より練磨の功空しからずしてその声の美なること全く野生の鶯と異れり、人或は云はん、斯くの如きは人工の美にして天然の美にあらず、谷深き山路に春を訪ね花を探りて歩く時流れを隔つる霞の奥に思ひも寄らず啼き出でたる藪鶯の声の風雅なるに如かずと、然れども妾は左様には思はず、藪鶯は時と所を得て始めて雅致あるやうに聞ゆる也、その声を論ずれば未だ美なりと云ふ可からず、之に反して天鼓の如き名鳥の囀るを聞けば、居ながらにして幽邃閑寂なる山峡の風趣を偲び、渓流の響の潺湲たるも尾の上の桜の靉靆たるも悉く心眼

心耳に浮び来り、花も霞もその声の裡に備はりて身は紅塵万丈の都門にあるを忘るべし、是れ技工を以て天然の風景とその徳を争ふもの也音曲の秘訣も此処に在りと。又鈍根の子弟を耻ぢしめて、小禽と雖も芸道の秘事を解するにあらずや汝人間に生れながら鳥類にも劣れりと叱咤すること屢々なりき（p445）

⑧ 佐助は春琴の苦吟する声に驚き眼覚めて次の間より馳せ付け、急ぎ燈火を点じて見れば、何者か雨戸を抉じ開け春琴が伏戸に忍入りしに、早くも佐助が起き出でたるけはひを察し、一物をも得ずして逃げ失せぬと覚しく、既に四辺に人影もなかりき。此の時賊は周章の余り、有り合はせたる鉄瓶を春琴の頭上に投げ付けて去りしかば、雪を欺く豊頬に熱湯の余沫飛び散りて口惜しくも一点火傷の痕を留めぬ。素より白璧の微瑕に過ぎずして昔ながらの花顔玉容は依然として変らざりしかども、それより以後春琴は我が面上の些細なる傷を耻づること甚しく、常に縮緬の頭巾を以て顔を覆ひ、終日一室に籠居して嘗て人前に出でざりしかば、親しき親族門弟と雖もその相貌を窺ひ知り難く、為めに種々なる風聞臆説を生むに至りぬ（p450, 451）

⑨ 蓋し負傷は軽微にして天稟の美貌を殆ど損ずることなかりき。その人に面接するを厭ひたるは彼女が潔癖の致す所にして、取るにも足らぬ傷痕を耻辱の如く考へしは盲人の思ひ過しと云はん（p451）

⑩ 然るに如何なる因縁にや、それより数十日を経て佐助も亦白内障を煩ひ、忽ち両眼暗黒となりぬ。佐助は我が眼前朦朧として物の形の次第に見え分かずなり行きし時、俄盲目の怪しげなる足取りにて春琴の前に至り、狂喜して叫んで曰く、師よ、佐助は失明致したり、最早や一生お師匠様のお顔の瑕を見ずに済む也、寔によき時に盲目となり候もの哉、是れ必ず天意にて侍らんと。春琴之を聴きて憮然たること良々久し（p451）

引用箇所を一つずつ見ていくと、佐助が春琴に仕えるようになったのは春琴が失明した後のため、①から③は佐助が誰かから伝え聞いた内容であることが分かる。①は春琴の生家と両親に関する情報のため、事実であろう。しかし、②の「四歳の頃より舞を習ひけるに挙措進退の法自ら備はりてさす手引く手の優艶なること舞妓も及ばぬ程なりければ、師もしばしば舌を巻きて」や、「又早くより読み書きの道を学ぶに上達頗る速かにして二人の兄をさへ凌駕したりき」、さらに③の「されば両親も琴女を視ること掌中の珠の如く、五人の兄妹達に超えて唯り此の児を寵愛しけるに」

は他者から春琴への評価であり、その場に居合わせなかった佐助が語ったとしても、信憑性の低い事柄として捉えられてしまう可能性がある。つまり、佐助がその場に居合わせていない頃の春琴の様子を、客観的な事実として見せるために「鵙屋春琴伝」をこの場面で引用したのだと考えられる。

④以降の引用は佐助が春琴に仕えた後の内容である。④では春琴が「同門の子弟」よりも琴の演奏が優れていたことが述べられており、⑤では春琴と佐助の師弟関係が始まった経緯が明らかになっている。さらに、⑤では「佐助は天にも昇る心地して」のように、佐助が春琴に稽古をつけてもらい始めた当時の心境が挿入されている。このことから、「鵙屋春琴伝」はやはり佐助の思いが組み込まれていることが分かる。また、⑥は春琴が潔癖症であったことが述べられており、⑦は弟子に対して、春琴が鳥類である鶯よりも劣っていると叱咤したと書かれている。⑧から⑩は春琴が何者かに熱湯をかけられ、顔に火傷を負った場面の記述である。（⑧から⑩が示す内容とてる女の発言との相違については、第三節で考察する）④の、春琴が十五歳という若さで周りに敵がいない状態を作り上げたということは、幼少の頃から春琴は他人から妬まれても仕方がない存在であったとも言い換えることができる。また⑦の、子弟に対する春琴の発言は過激なものであり、子弟に恨まれる原因となる発言であったと読むことができる。つまり、④と⑦は、春琴が他者から恨まれる可能性を秘めていることを示した箇所である。その恨みが、春琴に熱湯をかけることに繋がったと読者に思わせる効果が期待できる。さらに、⑥の春琴が潔癖症である様子が描かれている箇所は、⑧に書かれている、〈春琴は熱湯の飛沫が飛び散った程度の火傷しか負っていないこと〉、また、⑨に書かれている〈火傷は軽症であるにも拘らず、他人と顔を会わせること嫌がった〉という内容に整合性を持たせることができる。

以上より、佐助と出会う前の春琴の様子を「鵙屋春琴伝」から引用することにより、情報の信憑性を高めていると言える。また、春琴の人柄を描く中で、春琴が常に他者から妬まれる可能性を秘めた存在であったことを示す場面でも、「鵙屋春琴伝」は引用されている。さらに、春琴が完璧主義であるために、顔の火傷は僅かなものであったが人に顔を見せたがらなかったのだと暗に示している。つまり、「鵙屋春琴伝」で引用している箇所は、佐助が理想とする春琴像を客観的な事実として示し、それを読者に共有する役割と、事実とは異なることをあえて炙り出す役割を担っていると言える。

二　てる女が果たす役割

『春琴抄』では、生田流の勾当で晩年の春琴と佐助に仕えたてる女の発言と明らかに分かる箇所がいくつか存在する。てる女は、「私」と会う場面で「萩の茶屋の方に住んでおられる七十恰好の老婦人」と説明されており、年に一、二回程春琴と佐助の墓を参り、お経料の支払いも彼女がすると書かれている。また、作中で「私」と春琴・佐助を繋ぐ重要人物であり、「私」は生前の佐助と春琴を知る人物に複数人会うが、名前と姿が描かれるのはてる女のみである点も見逃せない。生前の春琴と佐助についてる女が語った内容は、てる女の証言を本文中にそのまま引用した場合と、てる女から聞いた話を「私」が語った場合の二つのパターンに分けられる。それら二つのパターンに分けた該当箇所を引用しながら、作中でてる女が果たす役割を考察する。

まず、てる女の証言をそのまま引用した場合を見る。尚、この引用箇所の判断基準は、春琴を「お師匠さま」あるいは「お師匠様」と表記したものかどうかとする。

①　お師匠さま〔春琴のこと〕は舞がお上手だったそうにござりますが琴や三味線も五つ六つの時分から春松という検校さんに手ほどきをしてお貰いなされそれからずっと稽古を励んでおられました、それ故盲目になってから始めて音曲を習われたのではないのでございます、よいお内の娘さん方は皆早くから遊芸のけいこをされますのがその頃の習慣でございました（略）そうしてみれば音曲の方にも生れつきの天才を備えておられたのでございましょう（略）ただ盲目になられてからは外に楽しみがございませぬので一層深く斯の道へお這入りなされ、精魂を打ち込まれたのかとぞんじます（p432）

②　お師匠さまがいつも自慢をされましたのに春松検校は随分稽古が厳しいお方だったけれど、わたしは身に沁みて叱られたということがなかった褒められたことの方が多かった、私が行くとお師匠さんは必ず御自分で稽古をつけて下されそれはそれは親切に優しく教えて下さるのでお師匠さんを怖がる人たちの気が知れなんだということでございます、でございますから修行の苦しみというものを知らずにあれまでにおなりなされたのは天品だったのでございましょう（p432）

③　お師匠様は厠から出ていらしっても手をお洗いになったことがなかったなぜなら用をお足しになるのに御自分の手は一遍もお使いにならない何から何まで佐助どんがして上げた入浴のときもそうであった高貴の婦人は平気で体じゅうを人に洗わせて羞恥ということを知らぬというがお師匠様も佐助どん

に対しては高貴の婦人と選ぶ所はなかったそれは盲目のせいもあろうが幼い時からそういう習慣に馴れていたので今更なんの感情も起らなかったのかも知れない。（略）佐助は実に此のような世話を一人で引き請け合間には稽古をして貰い時にはお師匠様に代って後進の弟子達に教えもした（p442, 443）

④ お弟子さんはほんに少うございましたが中にはお師匠さんの御器量が目あてで習いに来られるお人もございました、素人衆は大概そんなのが多かったようでございます（p448）

⑤ 佐助さんはお師匠様を始終美しい器量のお方じゃと思い込んでいやはりましたので私もそう思うようにしておりました（p451）

①は第一節の①～③と同様、佐助と出会う前の春琴の様子をてる女が説明したものである。てる女が春琴の家に内弟子として来た時、春琴は既に四十六歳であったため、春琴の幼少期を実際に見た訳ではない。しかし、当時の春琴の様子を他者に語ることができる程、春琴のことを知っているということは、春琴や佐助から事細かに春琴の過去について教えられたと考えられる。②は、てる女の発言の中に、「春松検校は随分稽古が厳しいお方だったけれど、わたしは身に沁みて叱られたということがなかった褒められたことの方が多かった、私が行くとお師匠さんは必ず御自分で稽古をつけて下されそれはそれは親切に優しく教えて下さるのでお師匠さんを怖がる人たちの気が知れなんだ」というものがある。ここには春琴が実際に語ったと思われる発言が組み込まれており、てる女が春琴の発言を引用しながら「私」に語っていることが分かる。③では、てる女の発言の中に「私」の語りが組み込まれている。②と③のように、てる女の発言の中に春琴の語りや「私」の語りを組み込むことによって、過去の回想をより現実的に見せようとしているのではないかと考えられる。④と⑤はてる女の発言をそのまま引用した箇所である。④は春琴の器量が目当てで習いに来る人がいたという内容であり、「鵙屋春琴伝」に特筆すべきことではないため、てる女に語らせたと思われる。⑤は「私」が春琴の容貌についてる女に質問し、それに対する答えである。「そう思うようにしていた」という発言から、てる女は佐助の〈春琴は死ぬまで美しい容貌をしていた〉という思い込みに合わせていたことが推測できる。晩年の春琴の姿を見ていたてる女は、火傷を負い、尚且つ年老いた、美しいとは言えない状態の春琴を見ていたはずである。しかし、てる女はそのような春琴の姿を「私」に話すことはしない。つまり、てる女は春琴と佐助と関わる中で、二人を慮る気持ちが生まれたのだと考えられる。あるいは、春琴と佐助を受け止めるという観点から、ここではてる女の異常性を

描いているとも考えらえる。

次に、てる女から聞いた話を「私」が言い換えた内容を引用する。

① 鳴沢てる女その他二三人の人の話に依ると賊は予め台所に忍び込んで火を起し湯を沸かした後、その鉄瓶を提げて伏戸に闖入し鉄瓶の口を春琴の頭の上に傾けて真正面に熱湯を注ぎかけたのであると云う（p451）

② てる女が佐助自身の口から聞いた話に春琴の方は大方気が折れて来たのであったが佐助はそう云う春琴を見るのが悲しかった、哀れな女気の毒な女としての春琴を考えることが出来なかったと云う（p454）

③ てる女の言に依れば当時門弟達は佐助の身なりが余りみすぼらしいのを気の毒がり今少し辺幅を整えるように諷する者があったけれ共耳にもかけなかった（p454, 455）

①は、春琴が顔に熱湯をかけられた際の状況を詳しく説明したものである。おそらく佐助がてる女やその他の人に語った内容であると思われるが、佐助が春琴を襲った人間を見ていた訳ではないため、佐助が憶測で話している可能性が高い。また、この引用の直前で「私」は火傷を負った春琴の容貌について「事実は花顔玉容に無残な変化を来したのである」と言う。これは、「鴫屋春琴伝」に描かれた、「春琴は我が面上の些細なる傷を耻づること甚しく、常に縮緬の頭巾を以て顔を覆ひ」という記述から矛盾を感じ、推測したものであると言える。②は、顔に火傷を負った後の春琴の様子について、佐助がてる女に語った内容である。ここから、佐助は春琴の態度の変化を拒み、春琴には傲慢なままでいてほしいという欲望を持っていることが分かる。③は、顔に火傷を負った春琴に代わり、「温井琴台」という名前で門弟達に稽古をつけていた頃の佐助の様子を表したものである。門弟達から身なりを整えるように言われるが、佐助はその助言を聞き入れない。この様子から、佐助はかつての春琴と同じ師匠という立場になっても、春琴は永久に自分にとっての師匠であり、その立場に自分が取って代わることはできないと考えているのではないだろうか。

以上より、てる女の証言をそのまま引用した場合は、「私」が主体となって語る回想よりも「私」の主観を排除し、客観的事実に近く見せる効果が期待される。また、てる女から聞いた話を「私」が言い換えた内容は、「私」の価値観が組み込まれたものであると言える。しかし、これまでの引用から、てる女の思考は佐助の影響を受けていたと言える。そのため、てる女の発言をそのまま引用すると、写実的ではない可能性が考えられる。つまり、一見すると主観的なのは「私」であり、客観的なのは〈てる女〉であると捉えられるが、実は「私」よりも〈てる女〉の方が主観的にし

か物事を捉えられていないと読むこともできる。そのため、敢えてる女から聞いた内容を「私」に語らせたのではないだろうか。さらに両者に共通して言えることは、春琴の生涯を後世に残す目的で書かれた「鵙屋春琴伝」に載せる必要のない情報ではあるが、『春琴抄』を読む上では必要不可欠な情報であることだ。例えば、引用④の、「お弟子さんはほんに少うござりましたが中にはお師匠さんの御器量が目あてで習いに来られるお人もござりました、素人衆は大概そんなのが多かったようでござります」では、春琴の美貌は人々を引きつけ、その美しさに嫉妬する者が春琴の顔に熱湯を浴びせた可能性があるという説を裏付ける大事な証言となる。このように、様々な視点から春琴と佐助について語らせることで、読者の想像性を掻き立て、解釈の余地を与えているのではないだろうか。しかし、あくまでも限定された読みであることもここには隠されている。

三　「鵙屋春琴伝」の記述とてる女の発言の相違

春琴が何者かに熱湯をかけられ火傷を負う事件について、「鵙屋春琴伝」とてる女の発言には大きな相違が見られる。まず、「鵙屋春琴伝」に書かれている当時の様子を引用する。

①　佐助は春琴の苦吟する声に驚き眼覚めて次の間より馳せ付け、急ぎ燈火を点じて見れば、何者か雨戸を抉じ開け春琴が伏戸に忍入りしに、早くも佐助が起き出でたるけはひを察し、一物をも得ずして逃げ失せぬと覚しく、既に四辺に人影もなかりき。此の時賊は周章の余り、有り合はせたる鉄瓶を春琴の頭上に投げ付けて去りしかば、雪を欺く豊頬に熱湯の余沫飛び散りて口惜しくも一点火傷の痕を留めぬ。素より白璧の微瑕に過ぎずして昔ながらの花顔玉容は依然として変らざりしかども、それより以後春琴は我が面上の些細なる傷を耻づること甚しく、常に縮緬の頭巾を以て顔を覆ひ、終日一室に籠居して嘗て人前に出でざりしかば、親しき親族門弟と雖もその相貌を窺ひ知り難く、為めに種々なる風聞臆説を生むに至りぬ（p450, 451）

②　蓋し負傷は軽微にして天稟の美貌を殆ど損ずることなかりき。その人に面接するを厭ひたるは彼女が潔癖の致す所にして、取るにも足らぬ傷痕を耻辱の如く考へしは盲人の思い過しと云はん（p541）

③　然るに如何なる因縁にや、それより数十日を経て佐助も亦白内障を煩ひ、忽ち両眼暗黒となりぬ。佐助は我が眼前朦朧として物の形の次第に見え分かずなり行きし時、俄盲目の怪しげなる足取りにて春琴の前に至り、狂喜して叫んで曰く、師

よ、佐助は失明致したり、最早や一生お師匠様のお顔の瑕を見ずに済む也、寔によき時に盲目となり候もの哉、是れ必ず天意にて侍らんと。春琴之を聴きて憮然たること良々久し（p451）

続いて、当時の様子を語ったてる女の証言を引用する。

鴫沢てる女その他二三人の人の話に依ると賊は予め台所に忍び込んで火を起し湯を沸かした後、その鉄瓶を提げて伏戸に闖入し鉄瓶の口を春琴の頭の上に傾けて真正面に熱湯を注ぎかけたのであると云う最初からそれが目的だったので普通の物盗りでもなければ狼狽の余りの所為でもないその夜春琴は全く気を失い、翌朝に至って正気付いたが焼け爛れた皮膚が乾き切るまでに二箇月以上を要した中々の重傷だったのである。（p451）

両者の記述には、内容が食い違っている場面が二つある。一つは、春琴を襲った者が春琴の家の侵入し、眠っている春琴に近づく場面である。「鴫屋春琴伝」では、「何者か雨戸を抉じ開け春琴が伏戸に忍入りし」と書かれており、てる女の証言では「賊は予め台所に忍び込んで火を起し湯を沸かした後、その鉄瓶を提げて伏戸に闖入し」となっている。もう一つは、春琴が何者かに熱湯を浴びせられ、顔に火傷を負う場面である。「鴫屋春琴伝」には、「有り合はせたる鉄瓶を春琴の頭上に投げ付けて去りしかば、雪を欺く豊頬に熱湯の余沫飛び散りて口惜しくも一点火傷の跡を留めぬ」や「負傷は軽微にして天稟の美貌を殆ど損ずることなかりき」と書かれており、春琴が顔にかけられた熱湯は僅かであり、火傷の跡もほとんど分からない程度のものであったことが示されている。一方、てる女の証言では、「鉄瓶の口を春琴の頭の上に傾けて真正面に熱湯を注ぎかけた」や「焼け爛れた皮膚が乾き切るまでに二箇月以上を要した中々の重傷だった」となっており、春琴への熱湯の浴びせ方や火傷の状態が、「鴫屋春琴伝」の記述とは大きく異なっていることが分かる。

「私」が〈てる女その他二三人〉から聞いた話を事実と定義すると、「鴫屋春琴伝」は事実とは異なる内容を意図的に書き換えることにより、佐助が自分自身の願望を露呈させたものだと思わせる効果がある。また、世間にこの書物を出す際に、生前プライドの高かった春琴に恥をかかさないため、このような内容に差し替えたと考えることもできる。春琴が亡くなった後も春琴のことを考え、このような配慮をしたことは、春琴に対する佐助の忠誠心からもごく自然であると言えよう。しかし、世間には春琴の美しい姿のみを知ってもらいたいと思う一方、身近にいた者には事実を伝えたいという気持ちも佐助にはあったのではないだろうか。以

上より、佐助は、佐助の二重性の中に春琴をたゆたわせていると言える。

また、「鵙屋春琴伝」には佐助の失明の過程について「それより数十日を経て佐助も亦白内障を煩ひ、忽ち両眼暗黒となりぬ」と書かれており、佐助の失明の仕方は不自然であり、都合良く見せていると言える。作中において、佐助が側近者に自ら目に針を突いて失明したことを語っていることからも、「鵙屋春琴伝」に書かれていることは虚偽であることが分かる。よって、春琴と彼女を取り巻く人物そのものが伝説であるかのように思わせるために「鵙屋春琴伝」という表題にしている可能性も考えられる。しかし、春琴の顔の火傷の状態を描いた箇所のように、「鵙屋春琴伝」にはいくつかの矛盾点があることから、佐助が理想と現実の狭間で揺れていたとも読み取れる。

『春琴抄』は「鵙屋春琴伝」と〈てる女〉の双方に語らせることにより、より現実味のある作品にしていると読者に思わせることを可能にした。しかし、春琴と佐助の物語を「鵙屋春琴伝」と〈てる女〉の語りでフィルターをかけ、さらにそれらの語りを語り手の「私」というフィルターを通して読者は『春琴抄』を読んでいると言える。つまり、春琴と佐助の物語に対してフィルターにフィルターをかけることで、真実から遠ざけているのだ。

おわりに

本稿では、「鵙屋春琴伝」とてる女の発言に焦点を当て、両者の間にある相違の理由を述べた。春琴の生涯について書かれた「鵙屋春琴伝」は、情報の信憑性を高める効果をもつ。その効果を利用して、春琴にとって都合の悪い情報を排除し、より佐助の理想とする春琴に近づけていたと考えられる。その一方で、てる女が語る内容は後世に残すことを目的とした「鵙屋春琴伝」に載せる必要のないことであるが、『春琴抄』を読む上では必要不可欠な情報であると言える。そして、春琴のプライドを傷つける内容を残したくないという思いと、身近にいた者には春琴の本当の姿を知ってほしいという思いの間で佐助が揺れていたことが、両者の語りの間に相違が生じた理由であろう。

全体の考察を通して、『春琴抄』は佐助の意図が強く反映されている物語でありながらも、語り手である「私」というフィルターを通して描かれている物語でもあることが分かった。また、「私」と接触するてる女の証言も物語において重要な役割を担っていることから、『春琴抄』という作品名でありながら春琴以外の人物の〈語り〉が、作品の大部分を占めている点に、本作品の歪みが集約されていると言える。

注（1）谷崎潤一郎『春琴抄』一九五一年一月　新潮社
（2）千葉俊二『別冊国文学No.54　谷崎潤一郎必携』二〇〇一年　學燈社
（3）中里恒子「美意識の結晶―『春琴抄』について」一九七五年十月

〈参考文献目録〉
〈テクスト〉
・谷崎潤一郎『日本現代文學全集四十三　谷崎潤一郎集（一）』一九六三年　講談社

〈参考文献〉
・三枝康高『谷崎潤一郎論考』一九六九年　明治書院
・河野多恵子『谷崎文学と肯定の欲望』一九八〇年　中央公論社
・アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』一九八四年　大修館書店
・ジャン＝ポール・クレベール『動物シンボル事典』一九八九年　大修館書店
・谷崎昭男・他『群像　日本の作家8　谷崎潤一郎』一九九一年　小学館
・永栄啓伸『谷崎潤一郎論　伏流する物語』一九九二年　双葉社出版
・永栄啓伸『評伝　谷崎潤一郎』一九九七年　和泉書院
・千葉俊二『別冊国文学No.54　谷崎潤一郎必携』二〇〇一年　學燈社
・吉美顕『谷崎における女性美の変遷―西洋文学との関係を中心として―』二〇〇七年　花書院

（二〇一八年度卒業）